

スポーツバカ

東京慈恵会医科大学大学院病態解析・生体防御学研究科

臨床検査医学専攻博士課程

朴 鍾嫻

韓国の「受験戦争の事情」について日本のメディアでも度々取り上げられている。韓国の大学受験、いわゆる日本でセンター試験に当たるものは「大学修学能力試験」といわれ11月に行われる。毎年警察が出動するという騒ぎも起きる。そのため、韓国が日本以上の学歴重視社会であると認識されている方が多いだろう。これは韓国の失業率に起因すると言われており、いわゆる「よい大学」に合格することが、少なくとも就職するための最初のハードルである。よい大学に合格するために、受験生は早朝から夜遅くまでひたすら勉強のみで1日を暮らしている。そして受験生でもない子供も、複数の塾に通いながら1日を机の上で生活しているのが大半である。

韓国では、勉学面だけでなく、エリート体育(アスリート)の場面においても事情は変わらない。子供の時からある種目を決め、そのスポーツを本格的に始めたら、プロスポーツ選手になることを目標に人生をそれだけに邁進して生きていく。勉学よりスポーツが優先になる。すなわち、スポーツか学業かどちらかを選ばざるを得ない。

実は、私は後者であった。率直に言えば、前者のような受験の大変さは経験していない。私はアスリートとして、学生時代にやるべき勉強はさておき、サッカーだけで学生時代を過ごしてきた。私は、プロサッカー選手を目指し、小学生から大学1年までサッカーをやってきた。当時は、ヨーロッパや日本の部活のようにスポーツと勉学が両立できる環境ではなく、小学校の時から寮で合宿しながらプロサッカー選手を目指して、ひたすらサッカーの練習をしなければならぬ厳しい環境であった。いわゆる「スポーツバカ」であった。夏休みだけではなく、新学期が始まって、全国あちこちで大会があったため、大会に出るのが当たり前のことであった。学校の先生には「すみません、サッカー部ですけど…」と一言いえばすべてが許された。授業を受けなくても、宿題なんてしなくても運動部は大会で成績さえ出せばすべてのことが許される環境であった。学生時代に他の学生たちにいつも「サッカー部はいいな。勉強しなくても進学できちゃうんだから…」と言われた。当時は、自分もラッキーだと思っていた。

中学校まではせめても午前中の授業は受けさせられた。高校のときは、練習、練習、練習…授業すらも受けず、朝、昼、夜をひたすら練習で費やした。サッカー部は学校の制服も持っていなかった。恥ずかしい話だが、高校3年間このような感じで真面目に1日も授業を受けたことがない。サッカー部の中には自分のクラスが何組か知らない子もいて、そしてほとんど自分のクラス担任の先生のお名前も知らなかった。高校1年の秋、全国大会では予選で落ちてしまい、翌日に監督は怒りながら「お前ら、授業受けてこい！」と叫んだ。サッカー部の罰というのは授業を受けさせることであった。制服も持っていない私たちが、背中に「〇〇高校サッカー部」と書いてあるジャージの姿で、しかもめったに入らなかったことのない教室に入るなんて…とにかく、み

んなが勇気を出してそれぞれの教室に入った。すると驚いたことに、私のクラスに私の机と椅子はなかった。当然、いつも空席なのでその机と椅子は倉庫にいれられてしまったのである。しかも教室で勉強していた学生たちは、「あの人、誰？誰？」とこそこそ言っていた。ショックだった。同じクラスメートなのに1人も知り合いがない。恥ずかしくて、どうすればいいのか戸惑った。この時のショックから、私は大学に入ったら授業も受けて、レポートも書いてみたい、勉強のストレスを味わいたい、という熱望するようになった。しかし、大学生になっても授業を受けずにひたすら練習をする環境は全く変わらなかった。ガッカリした。ある日、午後の練習のためにグラウンドに向かっている時だった。キャンパスを横切ってグラウンドまで歩いていくのだが、そこには、授業に遅れたのか腕時計をみながら走る学生、授業が終わったのかノンビリしている学生たち、かっこよく片手には分厚くて難しそうなテキストをもっている学生が目に入った。これが大学のごく普通の風景かもしれないが、私にはまるで別の世界のように見えた。

その時、決心した。スポーツ選手であってもみんなと同じく勉強がしたい。しかし、どちらかの道を選ばなければならなかった。サッカーを続けるか、サッカー部を脱退して一般の学生と授業を受けるか。今までできなかった分、より広い世界でたくさんのことを学びたいと強く思うようになった。散々考えたあげく、監督と相談し、10年以上やってきたサッカー部をやめ、新たな出発点に立つことにした。最初は、本当にサッカーをやめてもうまくいけるのか、これからは全く異なる世界になるのだが大丈夫なのか、不安でいっぱいだった。しかし、10年以上の時間をサッカーに注いできたことに関して、決して無駄だったと思ったことはない。むしろ、スポーツ選手生活をやってきたので今の自分がいるのではないかと思う。ただ、あの時、強制的ではなく、そして勉学とスポーツが両立できる環境だったら自分の人生はどう変わってきたのだろう、とずっと思っていた。

結果的に私はプロサッカー選手にはなれなかった。しかし、その時に味わった挫折感は逆に私に勇気を芽生えさせてくれた。その時に新しい道を歩もうとした決断は決して間違っていなかったと思う。

そして2010年、大学卒業後に日本へ留学した。その時の決断のおかげで、日本に来て研究することができ、最先端の実験技術を習得することもできた。そして渥美財団の奨学生になれる機会にも恵まれた。2018年には医学博士号も取ることができた。

今の時代は、私の時と比べて大分変わってきたらしい。小学校のサッカー大会は夏休み中や週末に行うことが義務化され、大学生の選手も成績が何点以上とれないと大会に出場できないなどスポーツ先進国システムを真似しつつある。とはいうものの、まだ成績重視の昔の方式で行われている所も残存している。

私は現在、運動と脳機能に関する研究を行い、研究成果を学会、論文に随時公表し、総合的に研究者として実績を積んでいくことを希望している。そして将来的には、私のようなスポーツバカの学生たちに、この道の楽しさを教えてあげたい。また、日本での修士・博士課程及びポスドク時に習得した経験や知識を活かして、母国のスポーツ生理学やスポーツ医学分野の発展に貢献したいと強く願っている。